

都立駒込病院長吉田尚先生及び渡辺能持衛生局長殿への質問並びに要望書（公開）

I, これまでの経過

95年1月4日午後1時15分、院長室に突然呼び出され、足立山夫副院長から「衛生局の指示で心身医療科は、定員1を削減することになった。今後は常勤医は置かず、非常勤医で運営して行くことになった」との報告を受けた。さらに岡井副院長より「クビではなく、移動に際しては先生の身分保障を十分考慮します」との追加発言があった。

同年1月10日足立副院長を訪ね、医学会議に報告するために常勤医の削減の正式の理由を説明するように求めた。これに対し足立副院長は「全都立病院の見直しの一つであり、衛生局は理由を明らかにしてはいない。採算制+ α だろう。服部前院長の心身医療科は必要ないという発言を聞いた人が査定しているからだろう」と回答した。

II, 質問

1, 配置転換について

- 移動の本当の理由は何か？採算性だけでは正当な理由にならないと思う。
- 採算性+ α と言うが、 $\langle \alpha \rangle$ とは何か？
- 移動させる合理性と必要性を説明してほしい。
- これまでの実例と全く違うのをどう説明するのか？

今後他の科でも同じようなことが生じると考えて良いのか？

他の医師は、自分の希望通りの職場で働いているではないか？

2, 公益性について

- 癌の専門病院と言うのであれば、 $\langle \text{心} \rangle$ の専門家を置く必要性がある。
都立病院以外では出来ないことであり、駒込がやらなかったら、どこがやるのか？
公的病院は採算性だけを考えていいのか？
- 責任ある医療の為には常勤医師が必要でないのか？
4月以降自殺者が出たら、誰が責任を取るのか明確にしてほしい。

3, 都民の絶大な支持について

- 当科は総合病院の心身医療科として、昭和51年2月にわが国で最も早く設立され、現在まで19年間、日本心身医学会の指導的地位を築き維持してきた。この事実を如何に評価されるのか？
- 1年間の電話相談の回数の多さ（500件以上）や、今回の移動に反対する署名を行なった人の多さ（1000人以上）が、都民の当科に対する支持の大きさを表していると思う。このような多くの患者さんや都民の人たちの期待を裏切ることになるが、それを承知されているのか？

Ⅲ、当科の希望

- a) 本年1月から当院にもホスピスが発足し、パリアティブ・ケアやインフォームド・コンセントの考え方も院内に急速に普及しつつある。従って今後は、患者さんが医療サイドに心身の異常や死への不安を、これ迄以上にもっと切実に迫ってくるだろう。
- b) 服部前院長と足立現副院長は、機会ある度に「心身医療科は必要ない。精神科で代用できる」と主張されるが、本当に正しい指摘であろうか？不定愁訴や死の恐怖を訴える患者さんの大多数の方々が、精神科への受診を拒否し、当科への受診なら受け入れる事実をどう考えておられるか聞かせて頂きたい。
- c) 精神科医は確かに向精神薬の選択や精神病の治療に於いては一日の長があるが、患者さんの<心>を扱う精神療法の分野では、当科の医師の方が専門であり、より適していることを自信を持って主張したい。
- d) 従って現在の常勤医1名のポストの確保はもちろん、削減された前任者（河野友信先生）のポストの復活も要求したい。
- e) 当科の非常勤医の俵里英子先生（東大心療内科在籍）は、パリアティブ・ケアと東洋医学の専門家である。当院の精神面のケアのレベルの向上の為にも、常勤医としての彼女の採用を真剣に考えて欲しい。最低でも非常勤の日数を、現在の週1日から週4日に増やして欲しい。

Ⅳ、結語

確かに心身医療科は、小さな取るに足らない・どうでも良い科に思えるかもしれない。しかしそれは、精神面でのケアの大切さに対する、殆んど絶望的と思われる程の日本人の後進性・盲目性に基づいていることを忘れないで欲しい。

またさらに、この小さな科を受診する人たちの多くは、明らかに社会的弱者である。もし当科の定員削減を強行されるならば、弱者への”いじめ”とみなされ、必ずや大きな社会的制裁を受けられることであろうことを忠告させて頂きたい。

都立駒込病院長吉田尚先生及び渡辺能持衛生局長殿

95, 2, 13, 都立駒込病院心身医療科 毛塚満男

追記：なお吉田尚先生は、同”質問並びに要望書”に対して95年2月末までに回答すると、95年2月15日の会談で明確に表明されました。